はしがき

「大規模都市災害に伴うコミュニティの復興・再編過程」と題された本調査研究報告書は、1995年1月17日にわが国を襲った「戦後最悪の大災害」、阪神・淡路大震災を事例として、苦闘を続ける被災地の復旧・復興過程を地域社会（コミュニティ）単位で調査し、とりまとめたものである。

本研究の参加者は、いずれも社会学（地域社会学、災害社会学など）を専攻しており、早稲田大学社会科学研究所「都市研究部会」（1997年度まで）、同アジア太平洋研究センター「コミュニティ形成と支援システム」プロジェクト（1998～1999年度）などを舞台に、釧路沖地震や雲仙普賢岳災害における人間行動や被災地域社会の対応、さらには都市部における地域防災活動などに関する実証的な共同研究を積み重ねてきた。本研究も、それらの研究活動の延長線上に位置するものであり、現在も同大学「地域社会と危機管理研究所」（所長：浦野正樹早稲田大学文学部教授）において、研究活動が継続されている。

本来、この研究は、1999年春でいったん区切りをつけ、調査研究報告書にまとめる予定であったが、データ収集・処理のつまずきや報告書そのものの構成の見直しなどが重なり、とりまとめに大幅な遅延を来すこととなってしまった。むろん、遅延の責は、研究代表者であり本報告書の編集担当者である横田に帰せられるべきものである。研究助成をしていただいた、財団法人・第一住宅建設協会には、たいへんご迷惑をおかけしてしまった。ここに、心よりお詫び申し上げる次第である。

また、先に原稿をとりまとめ提出していただいた共同研究者の方々にも、深くお詫びを申し上げたい。

調査を実施するに当たっては、被災地で苦闘を続けておられる関係者の方々にたいへんお世話になった。いちいちお名前をあげることはしないが、ご多忙にもかかわらず、われわれの調査に快くご協力をいただいた被災地の皆様に、この場を借りて心から御礼申し上げる次第である。

被災地の復興過程は、21世紀の扉が開いた今もなお続いている。このささやかな調査研究報告書が、阪神・淡路大震災における「社会学的教訓」をいささかなりとも含んでいるならば、われわれの肩の荷も少しは軽くなるだろうという気がしている。

2001年11月29日

横田　尚俊